

日本におけるラクロスの普及に関する研究 1986-1991 年

在 原 瑛 吾

キーワード：ラクロス、学生主体、国際交流、ファッション

1. 研究の動機

現在ではラクロスという競技は、日本において男女ともに大学生・社会人を中心に行われている。しかしながら、日本におけるラクロスの歴史はまだ浅く、知名度も低いのが現状である。自身も大学に入ってラクロスというスポーツに初めて触れ、神戸大学にラクロス部が発足したのが関西の中でも早く、関西ラクロスの普及に大きく関わっていたことを知った。そこで、ラクロスという海外で生まれたマイナースポーツがどのようにして日本に導入され、組織が形成されていったのか、について疑問を持ち、先行研究では十分に明らかにされていないため、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的と意義

以上の動機から、本研究では、日本におけるラクロスの歴史について探り、競技誕生から、日本でのラクロス誕生やチーム発足の経緯、組織やリーグ戦の創設などに焦点を置き、ラクロスの普及の実態を解明することを本研究の目的とする、そして、日本におけるラクロスの更なる普及を展望するための一助となることを本研究の意義とする。

3. 先行研究の検討

高瀬(2001)による研究では、神戸大学ラクロス部を対象にした組織のライフサイクルに関する研究があるが、ラクロスの普及に関する記述は見られない。また、その他のラクロスに関する研究は、生理学的な研究や医学的な研究であり、歴史的な研究は

見られなかった。

4. 研究の課題と方法

本研究における普及とは、チームや組織が発足し、大会が創設される時期、いわゆる競技の基盤が形成されていく過程を普及と捉え、以下の3点を解明することを本研究の課題とする。1)日本にラクロスが根付くまでの競技の実施状況、2)日本においてラクロスのチーム・組織が発足した経緯、3)日本にラクロスが展開していった経緯

研究の方法としては、まず研究対象期間である1986-1991年を2期に区分し第2章と第3章で論じていくこととする。また、それを論じるにあたっての背景として、第1章では1980年以前の期間にも着目し、ラクロスの競技の誕生と海外での展開の実態を明らかにする。このように3期に区分し、以下のような時期区分に基づき実態を明らかにしていく。1)日本にラクロスが根付く以前の世界のラクロスの起源・展開と、日本でもラクロスが実施される時期(1980年代以前)、2)ラクロスが日本に導入され、協会の設立を経て、国内初のリーグ戦が開催される、日本ラクロス協会の基盤形成期(1986-1990年)、3)関西にもラクロスが誕生し、学生連盟の発足や、リーグ戦の設立を経て、関東とも繋がりを持つ、関西学生ラクロス連盟西日本支部の基盤形成期(1988-1991年)

5. 本論

1)1980年代以前のラクロス

ラクロスはアメリカがイギリスの植民地であ

った時代に、元々アメリカン・インディアンが部族の儀式やスピリチュアルなゲームとして行っていたものをイギリス人が競技化したものである。そして 1856 年に世界初のラクロスクラブがカナダで誕生し、その後、アメリカ、カナダ、イギリスを中心にカレッジスポーツとして人気を集め、1974 年には世界ラクロス連盟ができるなど、世界的には着実に普及してきた。一方、日本では 1902 年に「ラクロス術」という競技に関する書物が出版され、その後日本でもラクロスの試合が行われるなどの動きはあったが、日本にラクロスは根付かなかった。

2) 日本ラクロス協会の基盤形成期

日本にラクロスが根付くのは 1980 年代になってからである。慶應の大学生たちが雑誌に掲載されているラクロスの記事を見つけ、興味を持ったことがきっかけである。当時ラクロスが日本で行われていなかったため、アメリカ大使館に連絡をしたところ、ノリオ・エンドー氏を紹介された。エンドー氏は日本にラクロスを広めようとしていた人物であり、双方の目的が一致し、学生とエンドー氏等によって日本のラクロスは産声を上げる。エンドー氏の普及の裏側には、単なるスポーツ普及活動の枠を遥かに超えた、草の根レベルのスポーツ国際交流を通じて日米学生間の相互理解を深め、日米経済摩擦や日系アメリカ人のアメリカでの差別問題を少しでも緩和する、といった目的があった。これは後に発足する日本ラクロス協会の協会理念である **Lacrosse Makes Friends** の基礎にもなっている。その後、チーム数も徐々に増え、国内初のリーグ戦の開幕、国際親善試合など、関東を中心に普及していくこととなる。

3) 日本ラクロス協会西日本支部の基盤形成期

1988 年に関西でもラクロスが普及し始めるが、関東から伝播してきたのではなく、関西独自の起源があり、さらに 2 つのルーツがある。1 つは関西学院の男子学生が高校時代の留学先でラクロスの経験があり、大学でもチームを作ろうと仲間を集めたというきっかけがあり、も

う 1 つは神戸松蔭女子大学の当時の学長がアメリカの大学の学長からラクロスについて聞き、関西にも広めようと大学にチームを作ったことがきっかけである。前者はサークルの色が強く、後者は体育会の色が強かったが、1990 年に入ってから互いの交流も盛んになり、日本ラクロス協会学生連盟西日本支部の発足に至ることとなる。また、1990 年頃からラクロスのおしゃれやかわいいといった部分が女子に受け、雑誌やマスコミに取り上げられるようになる。それによって女子ラクロス部員の数が増加し、関西でもラクロスが盛んに行われるようになった。

6. 結論

日本におけるラクロスの普及には、社会的なネットワーク、ファッション性、国際交流が大きな要因となっていることが明らかになった。学生と大人達との偶然の出会いや、高校時代の同級生などの社会的なネットワークがなければラクロスの普及は遅れていたといえる。また、ファッション性が競技を始めるきっかけとなっていることもラクロスの大きな特徴のひとつである。そして、ジョンズ・ホプキンス大学との繋がりやホームステイなども日本にラクロスが根付く要素になっていることも明らかになった。

そして、やはりラクロス普及の軸となっているのは、協会理念にもなっている **Lacrosse Makes Friends** である。学生同士、そして国境を越えた深い繋がりがあったために、組織の形成、大会の発足など、現在に至るまで学生が主体となって運営することができたといえる。しかし、その一方で、学生主体であるが故に、金銭的なトラブルが生じるなど、組織としての管理の甘さを露呈するという実態も明らかになり、今後は改善していく必要がある点である。

また、行政や自治体によって形成された他の競技と違い、学生が主体となり自発的に競技が形成されたラクロスは、1980 年代のニュースポーツの形成における新たなモデルの 1 つであることが明らかになった。